報　告　書　抄　録

ふりがな	あがたずおういちいせき こうちしねごいちごうふん	あがたずおうにいせき こうちしねごいちいせき	あがたたきのみやにいせき こうちしねごにいせき	あがたおおいけうちいちいせき こうちいけのおくいちいせき
書　　名	阿方頭王Ⅰ遺跡 高地シ子ゴ１号墳	阿方頭王Ⅱ遺跡 高地シ子ゴⅠ遺跡	阿方瀧宮Ⅱ遺跡 高地シ子ゴⅡ遺跡	阿方大池内Ⅰ遺跡 高地池ノ奥Ⅰ遺跡
副　書　名	今治西部丘陵公園開発整備事業に伴う埋蔵文化財報告書			
巻　　次	第１集			
シリーズ名	今治市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第113集			
編集者名	櫛部　大作			
編集機関	今治市教育委員会			
所　在　地	〒794-8511　愛媛県今治市別宮町一丁目４番地１　tel. 0898-32-5200㈹			
発行年月日	西暦　2012年3月31日			

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あがたずおういちいせき 阿方頭王Ⅰ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 あがたおつ 阿方乙164-1ほか	382027		34° 04′ 21″	132° 58′ 16″	20010623 ～ 20011004	約1000	今治西部丘陵公園開発に伴う調査
あがたずおうにいせき 阿方頭王Ⅱ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 あがたおつ 阿方乙203ほか			34° 04′ 21″	132° 58′ 13″	20030205 ～ 20030325 20030416 ～ 20030709	約920	
あがたたきのみやにいせき 阿方瀧宮Ⅱ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 あがたおつ 阿方乙248-1ほか			34° 04′ 18″	132° 58′ 06″	20030715 ～ 20030918	約1000	
あがたおおいけうちいちいせき 阿方大池内Ⅰ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 あがたこう 阿方甲1006ほか			34° 04′ 18″	132° 58′ 13″	20050201 ～ 20050302	約1300	
こうちしねごいちごうふん 高地シ子ゴ１号墳	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 こうちちょうにちょうめおつ 高地町2丁目乙431			34° 04′ 26″	132° 58′ 25″	20031218 ～ 20040315	約200	
こうちしねごいちいせき 高地シ子ゴⅠ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 こうちちょうにちょうめおつ 高地町2丁目乙429-1			34° 04′ 28″	132° 58′ 25″	20031104 ～ 20031216	約1000	
こうちしねごにいせき 高地シ子ゴⅡ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 こうちちょうにちょうめこう 高地町2丁目甲2189-1			34° 04′ 31″	132° 58′ 26″	20031001 ～ 20031029	約460	
こうちいけのおくいちいせき 高地池ノ奥Ⅰ遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 こうちちょうにちょうめこう 高地町2丁目甲2182ほか			34° 04′ 22″	132° 58′ 23″	20010528 ～ 20010726	約230	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特記事項
阿方頭王Ⅰ遺跡	集落	弥生時代	段状遺構 土坑 溝 ピット	弥生土器 石器	
阿方頭王Ⅱ遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居 段状遺構 土坑 溝 柱穴・ピット	弥生土器 石器	
阿方瀧宮Ⅱ遺跡	集落	弥生時代	自然流路	弥生土器 石器	包含層内より県下最大の分銅形土製品が出土
阿方大池内Ⅰ遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	土坑 溝 ピット 鍛冶遺構？	弥生土器 須恵器 土師器 土師質土器 瓦質土器 陶磁器 石器	
高地シ子ゴ１号墳	墳墓	古墳時代	横穴式石室 周溝	須恵器 土師器 鉄製品	
高地シ子ゴⅠ遺跡	集落	弥生時代	段状遺構 土坑 溝 ピット	弥生土器 石器	
高地シ子ゴⅡ遺跡	集落	弥生時代	段状遺構 土坑 溝 ピット	弥生土器 石器	
高地池ノ奥Ⅰ遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	土坑 ピット	弥生土器 須恵器 土師器 石器	

『要約』

阿方頭王Ⅰ遺跡　弥生時代中期後半を主とし、遺構の大部分は主柱といえる構造を持たない段状遺構が占め、明確に定住を主とした住居は存在しないものの、壺・甕などの煮炊具の出土量は多い。また主要な遺構は切り合っており、ある程度持続的に利用されていたようである。

阿方頭王Ⅱ遺跡　丘陵北東斜面に展開される阿方頭王Ⅰ遺跡に比べ、地形自体の傾斜が穏やかで、竪穴住居を軸とした遺構構成し、弥生時代中期後半を主とする。周辺の丘陵に展開される遺跡の中では、竪穴住居などの主要な遺構が最も多い。また主要な遺構は切り合っており、ある程度持続的に利用されていたようである。

阿方瀧宮Ⅱ遺跡　自然流路内の堆積層から弥生時代中期後半を主とするまとまった遺物が検出されているものの、そのほとんどは上流部からの流れ込みと考えられる。中には、県下最大値の分銅形土製品が検出されている。周辺の遺跡からも数点検出されており、凹線文土器の伝搬に密接に関係している可能性がある。

阿方大池内Ⅰ遺跡　弥生・古墳・古代・中世・近世と幅広い時期が複合する遺跡であるが、調査面積に対してそれほど遺構が密集している感はない。古代～中世段階の鍛冶炉と推測される土坑が検出された。

高地シ子ゴ１号墳　横穴式石室を主体とした円墳で、構築石の収得目的による盗掘により上部構成石のほとんどは取り除かれている。墳丘は急斜面を利用し、削平されており、一部に版築も確認された。最低２段階の追葬が推定され、中世段階で石室内部が再利用されている可能性があり、７世紀前半に使用された墳墓と見られる。

高地シ子ゴⅠ遺跡　阿方頭王遺跡などに比べると急峻な斜面に遺跡が展開される。弥生時代中期後半を主とし、簡易的な構造をもつ遺構が主体で、短期間に利用された空間とみることができる。

高地シ子ゴⅡ遺跡　弥生時代中期後半を主とし、高地シ子ゴⅠ遺跡同様、生活の基盤となる住居関連の遺構は検出されず、遺跡の存続期間も短期間で簡易的な様相を示す。

高地池ノ奥Ⅰ遺跡　弥生時代中期後半を主とし、狭谷を利用したものであり、遺跡の存続期間も短期間で簡易的な様相を示す。